

【旧約聖書日課】アモス書 7章10～15節

¹⁰ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。¹¹アモスはこう言っています。『ヤロブアムは剣で殺される。イスラエルは、必ず捕らえられて、その土地から連れ去られる。』」

¹²アマツヤはアモスに言った。「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。¹³だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」¹⁴アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。¹⁵主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。」

【使徒書日課】使徒言行録 13章1～12節

¹アンティオキアでは、そこの教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。²彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」³そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

⁴聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、⁵サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。⁶島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。⁷この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。⁸魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。⁹パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、¹⁰言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。¹¹今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。¹²総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

【福音書日課】マルコによる福音書 6章1～13節

¹イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。²安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。³この人は、木匠ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。⁴イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。⁵そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにらなかった。⁶そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。⁷そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、⁸袂には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、⁹ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。¹⁰また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。¹¹しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とさなさい。」¹²十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。¹³そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

派遣の覚悟

「主イエスの後に従う」。これが、今年度、わたしたちの教会が何よりも心に留めていることです。主イエスが行かれた道に後から従い、主の御姿を後ろから追いかけながら、わたしたちは、主イエスがお導きくださるところに進み行こうとしています。そのとき、何よりも大切なことは、主イエスからいつも目を離さないことでしょう。主イエスの御声の響きを聞き取れるところに留まり、主イエスのお向けくださる眼差しの中に、いつも自分の身を置き続けることでしょう。主イエスという「ブドウの木」につながり続け、羊飼いである主イエスの養ってください羊の群れの一人であり続けることです。

教会に招かれて来ている子どもたちと共に歩むとき、わたしたちは、このような「主イエスの後に従う」者としての自分たちの姿を示して、彼らにも同じように歩んでもらいたいと願っているのではないのでしょうか。そのような歩みを共にする者として「教会」に連なり続けてもらいたいと、願っているのです。そして、このような願いは、子どもたちに対してだけでなく、わたしたちが周囲にいる多くの人に向けて抱いている願いでもあると思うのです。

しかしながら、主イエスは、「後に従うように」と招かれた弟子たちを、ただいつもご自分の後ろに控えさせていたのでも、目の届くところに留まらせていたのでも、ありませんでした。弟子たちだけで、宣教活動に遣わされることがあったのです。近くの人だけでなく遠くにいる周囲の人々をも、主のもとに招いて、主の後に従う者になるようにと導かせる働きを、弟子たちに担わせられたのです。

そのときには、杖一本と履物と最小限の着物のほかは何も持って行ってはならないと、主イエスはお命じになりました。宣教活動の最前線に出て行かせる弟子たちに、大きな覚悟を求められたのです。けれども、そのとき、弟子たちは、どれほどの覚悟を決めて出かけて行くことができたのでしょうか。

むしろ、このとき本当の意味で覚悟を決められていたのは、主イエスのほうだったのではないかと思います。幼子を初めてのお使いに行かせる親のような覚悟をもって、主イエスは弟子たちを送り出したのではないのでしょうか。いざとなったら、必ず自分が飛んで行って抱き上げ、連れ帰る。そのような覚悟を決められた主イエスに送り出されたからこそ、弟子たちも、たとえ覚悟は確かなものでなくとも、命じられるままに出て行くことができたのではないのでしょうか。

選り出され、送り出されて…

主イエスが弟子たちを宣教活動へと送り出されたように、教会も最初の時代から弟子たちの幾人かを教会外の宣教活動へと送り出してきました。中でも、教会が世界中に宣教活動を広げていく上で大きな役割を果たしたのが、使徒言行録の伝えるアンティオキアの教会だったようです。

アンティオキアは、エルサレムから北へ500キロほどのシリアの町で、当時のローマ帝国では、ローマ、アレクサンドリアに次ぐ大都市だったようです。この町に建てられた教会は、エルサレム教会から送り込まれたバルナバを核として活動を整え、周囲から「キリスト者(クリスティアノス)と呼ばれる」(使11:26)ほどに知られるようになっていました。そして、自分たちの教会から世界に向けて宣教師を派遣しようということにまでなったのです。

そのとき、アンティオキア教会には、**預言する者や教師たち**が幾人もそろっていました。困難が予想される宣教活動に遣わすのに十分な人材が、与えられていたのです。そのような有為の人材の中には、自ら手を挙げて宣教活動に赴くことを願い出た者もいたのではないのでしょうか。実際のところ、そのような者の中から、教会が送り出す宣教師を決めたのかもしれませんが、けれども、その宣教師派遣の出来事を、教会は、有為の人物が偉大な覚悟を決めて出かけて行った出来事として伝えることはなかったのです。その代わりに、神がご自身の計画のために選り出してくださった者を、教会が祈りと責任をもって送り出した出来事として、後代に伝えることとしたのです。それが、わたしたちの聴いている物語です。

わたしたちの教会では、アンティオキア教会のように世界に向けて宣教師を派遣するというようなことはないかもしれませんが、けれども、伝道者を送り出すことはあります。教会は、どんなに小さな教会でも、伝道者を生み、育て、送り出し、支え続けるという働きを担う責任があります。実際、石神井教会からも、過去に送り出した伝道者がいます。そのような伝道者のことを教会員名簿にも関係教職として掲載しています。その一人ひとりに対して、教会は、責任があります。祈り続ける責任、働きに送り出した群れとして支え続ける責任です。わたし自身、今でも、母教会からの祈りがどれほど支えになっているかと思えます。母教会だけでなく、神学生のときからこれまでに仕えてきた多くの教会の方々、折々に祈りを届けてくださり、ときには訪ねてきてくださり、わたしの牧師としての働きを支え続けてくれているのです。

そのような関係を続けることは、ただ、伝道者として送り出された牧師や伝道師の働きが支えられるためだけに大切なことなのではないと思います。わたしたちは皆、教会に連なり、教会の働きを共に担い、そしてまた、教会からそれぞれの生活に帰って行ってなおそこでキリスト者として毎日生きる者です。それは、わたしたちが皆、神に選り出されて教会に加えられ、召されてキリスト者とされ、そして、なおこの世の中で生きていくようにと繰り返し神のもとから遣わされていく者である、ということです。そうであれば、教会の祈りに支えられてこそ、キリスト者として為すべきことを為し続け得るのではないのでしょうか。

聖霊の告げる言葉を聞いて…

皆さんがキリスト者として為すべきことは、もちろん、教会内の働きに限定されたことばかりではありません。わたしたちがキリスト者とされたのは、一人ひとりに、神がお決めくださっていた使命があるからです。その使命の一部は、教会内の働きにあるかもしれませんが、けれども、その多くは、教会内ではなく外の働きにあるはずで、逆説的かもしれませんが、牧師や伝道師のほうが信徒の皆さんよりもむしろ教会内の働きの比率が高いとも言えるのです。

そのような教会内外でのキリスト者としての皆さんの働きが、どれだけ本当に為すべきこととして為されているか。神がお決めくださった仕事として目的が達成されているか。わたしたちは、自分自身の働きを振り返り、自己吟味し、ときに悔い改めをもって修正を施しながら、キリスト者として生きていくでしょう。ただ、わたしたちは、そのことを自分の中だけで完結させないのです。教会の営みの中にしっかりと位置付けるのです。いいえ、教会の営みの中に位置づけることを通して、神の御業の中で見るように導かれているのです。

バルナバとサウロ（パウロ）が新しい世界宣教の働きを始めようとしたとき、彼らは、教会の祈りの中に自らを委ねました。そして、教会は、主を礼拝し、断食をして、聖霊の告げる言葉を待ったのです。そのとき教会が取り組んだ「断食」は、願掛けのための「食断ち」ではありません。自らの中に聖霊を受け入れる余地を設けるための、霊的な「断食」をしたのでしょう。聖霊がお語りくださるのを聞く備えとして、教会は、自分たちが好んで聞きたがることを断ったのです。それは、もしかすると、バルナバやサウロの能力を評価するような言葉だったかもしれませんが。彼らの決断や覚悟を誉めそやす言葉だったかもしれませんが。教会の中には、いつでも、人を評価し、人を誉め、人をありがたがるという、世の中と変わらない見方が入り込むのです。そのような見方をする言葉を、わたしたちは皆、どこかで好み、期待しているところがあるのです。しかし、バルナバとサウロは、教会がそのような言葉を断ち、聖霊の告げる言葉を聞き取るまで、待ったのです。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために」と聖霊が告げていると教会が聞き取ったとき、二人は、教会の祈りと責任に後押しされて、神に与えられた使命に仕える者として、そこから遣わされていくことができたのです。

神に招かれ、キリスト者として召された皆さんが、神のお決めくださっていた働きを、教会においても、日々の生活においても、どこにおいても、まっとうすることができるよう、わたしたちは、ただ聖霊がお告げくださることに耳を傾けます。そして祈って、告げるのです。「あなたは、神のために選び出されたのです。神が前もってあなたにお決めくださっていた仕事、生涯をかけて担うべき使命があります。その働きに、神はあなたを当たらせようとしています。行きなさい、神のお示しになるところへ」。教会は、皆さんのために繰り返し祈って、そう告げるでしょう。わたしたちは、繰り返し、ここに立ち返るのです。ここに立ち返り、ここから、新しい神の使命に生きる歩みを歩み直すのです。